

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：25405

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653198

研究課題名(和文) 不安が比喩理解過程および比喩生成過程に及ぼす影響

研究課題名(英文) Effects of anxiety on metaphor interpretation and expression.

研究代表者

塚本 真紀 (Tsukamoto, Maki)

尾道市立大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：40310833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：不安が比喩理解・生成過程に及ぼす影響について検討を行った。研究材料として、不安状況下で言語化されやすい身体感覚を含む比喩表現をとりあげた。特性不安が比喩理解に影響を及ぼすこと、比喩表現を用いた文章作成時の文脈構成に特性不安の影響が認められること、身体感覚をどのような状態と結びつけて認知しているかが身体感覚的比喩表現を含む文章の読解ペースに影響を及ぼすことが明らかになった。一連の研究から、不安という情動的現象について、比喩表現に対してどのような反応を示すかという言語行動的観点からの検討が有効であることが示された。

研究成果の概要(英文)：The present research investigated effects of anxiety on metaphor interpretation and expression. Somatic-sensation metaphors were selected as the research stimuli, those are easy to be made a verbal expression under anxiety situations. As results, the personal trait anxiety was related to the score of metaphor intelligibility and to the context of sentence expression including somatic-sensation metaphors. The cognitive relevance between emotion and somatic-sensation was related to the variability of pace for reading text including a somatic-sensation metaphor. These results were supposed to suggest effectiveness of anxiety research from the point of metaphor interpretation.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：不安 比喩

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語と認知に対する説明を提供する包括的理論である関係フレーム理論では、特定の複数刺激が恣意的に関係づけられること、その際、直接学習されていない刺激間にも派生的に関係づけがなされること (= 派生的刺激関係) が、人間の言語や認知の中核となるプロセスであるとされる。近年、不安や抑うつなどの情動的現象について、この派生的刺激関係に基づき、「言語刺激に対してどのような反応を示すか？」という観点からの記述・説明が試みられている。本研究もその観点にたち、不安喚起状況下における言語的な反応をとらえることに主眼をおいて研究を開始した。

(2) 本研究では言語的な反応として比喻表現の理解・生成過程をとらえた。比喻は日常言語の概念体系にかかわる重要な認知能力と関係しており、個人の派生的刺激関係を反映していると考えられる。従来 of 比喻研究では、比喻を理解あるいは生成する側 (主体側) の心的状態の個人差は誤差として扱われ、研究対象要因としては取り上げられてこなかった。本研究では、これまでの比喻研究の中では誤差として扱われてきた主体側の心的状態 (本研究では不安) を影響要因として取り上げた比喻研究を行う。不安と比喻理解・生成過程との関係に着目した研究を行うことで、日常的な言語行動から、不安の発生・維持過程をとらえることが可能かどうか検討する。

2. 研究の目的

不安が比喻理解・生成過程に及ぼす影響について段階的に検討を行うことが研究の目的であった。

- ・研究材料とする比喻表現の選定
 - ・不安が比喻表現の理解に及ぼす影響
 - ・不安が比喻表現を用いた文章の作成に及ぼす影響
 - ・不安が比喻表現を含む文章の読解に及ぼす影響
- の順に検討を行った。

3. 研究の方法

(1) はじめに、研究材料とする比喻表現の選定を行うために、不安喚起状況下における言語表現の特徴を調べた。大学生 72 名を対象に、過去に不安を体験した個人的状況をイメージしたときに思い浮かぶ言葉を一定時間間隔で自由記述させ、その記述を分類することで、不安状況下における言語反応の特徴を明らかにした。

(2) 不安が身体感覚的比喻表現の理解過程に及ぼす影響について検討を行った。専門学校生 17 名を対象に直喩形式の身体感覚的比喻表現「心臓がドキドキするような気持ち」を呈示し、その表現のわかりやすさを評定させた。また、「心臓がドキドキするような気持ち」がポジティブな気持ちだと思えるかネガ

ティブな気持ちだと思えるかについて 5 段階で評定させた。さらに、特性不安 (不安に陥りやすい傾向) 尺度に評定を行わせ、わかりやすさ評定との関連性を検討した。

(3) 不安が身体感覚的比喻表現を用いた文章作成に及ぼす影響について検討を行った。不安喚起状況下で言語化されやすい身体感覚を用いた比喻表現を作成し、その比喻表現を用いた文章作成に特性不安による影響が認められるかどうか検討を行った。大学生 191 名を対象に、「心臓がドキドキする」「手に汗をかく」の 2 つの身体感覚表現について、その身体感覚表現を含む文章を自由記述させる課題を実施した。記述文章において身体感覚表現をどのような文脈で用いているかを分析し、特性不安との関連性を検討した。

(4) 不安が身体感覚的比喻表現を含む文章の読解過程に及ぼす影響について検討を行った。不安や緊張を伴う覚醒状態 (緊張覚醒) をあらかず比喻表現としても、やる気や元気を伴う覚醒状態 (エネルギー覚醒) をあらかず比喻表現としても用いられる「心臓がドキドキする」という身体感覚表現をとりあげ、その身体感覚表現を緊張覚醒と結びつけやすいか、エネルギー覚醒と結びつけやすいかという認知の個人差が、身体感覚的比喻表現を含む文章の読解過程に及ぼす影響について検討を行った。日本語を母語とする大学生 40 名を対象に、対呈示された緊張覚醒項目とエネルギー覚醒項目から、「心臓がドキドキする」という身体感覚とより関係があると思う項目を強制選択する課題を実施した。併せて、「心臓がドキドキした」という身体感覚表現を含む 11 文からなる文章読解課題を実施し、一文ごとの読解時間測定と読解文の再生課題を実施した。文章読解課題では「心臓がドキドキした」という身体感覚表現を含む 11 文からなる 2 種類の文章を使用した。一方は「心臓がドキドキした」という表現を不安や緊張を伴う状況記述に挿入した文章であり、他方は、「心臓がドキドキした」という表現をやる気や元気を伴う状況記述に挿入した文章であった。

4. 研究成果

(1) 不安喚起状況下における言語表現の特徴の検討から、不安状況をイメージすることで思い浮かぶ言葉には、その状況下における自分自身の内的反応をあらかず言葉が多く含まれることが明らかになった。不安を体験した個人的状況をイメージしたときに思い浮かぶ言葉として記述された表現の 50% 以上が自分に生じている内的反応を表す言葉であった。内的反応には「思い出せない」「頭のなかかもやもやする」などの「考えや悩み」、 「心配」や「落ち着かない」などの「気持ち」に加えて、「手に汗をかく」「ドキドキする」「冷や汗が出る」「頭が痛い」などの身体感覚的反応が多く記述されていた。そのため、この後の研究では、身体感覚的な比喻表現を

主な研究材料として用いることにした。

(2)「心臓がドキドキするような気持ち」のわかりやすさ評定に、特性不安による影響が認められた。特性不安が高い群は低い群にくらべ、わかりやすさ評定値のばらつきが大きく、評定値は低い傾向にあることが明らかになった(図1)。「心臓がドキドキするような気持ち」がポジティブな気持ちかネガティブな気持ちかについて評定させた結果を分析すると、特性不安高群は低群に比べ「どちらともいえない」という曖昧な評定をしている人が多く、このことがわかりやすさ評定のばらつきや低さに影響していると考えられた。

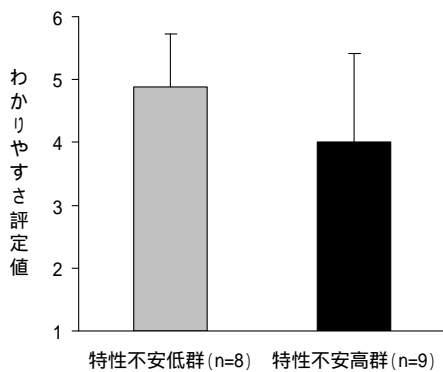


図1 特性不安低、高群別のわかりやすさ評定値 (グラフ内エラーバーは標準誤差)

(3)「心臓がドキドキするような」「手に汗をかくような」という身体感覚的比喻表現を用いて文章を作成する課題では、身体感覚的比喻表現を、不安や緊張などの感情を表す文脈で用いる場合もあれば、喜びや期待などの感情を表す文脈で用いる場合、それ以外の文脈で用いる場合もあることが明らかになった(図2)。また、特性不安が低い場合、身体感覚的比喻表現を不安や緊張などの感情を表す表現として用いにくいことが示された。

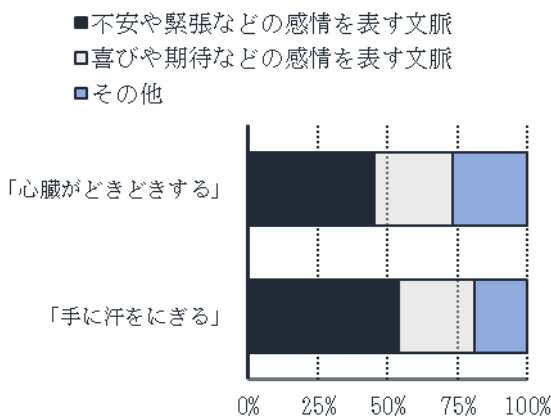


図2 文章作成課題における文脈の内訳

(4)強制選択課題でとらえた「心臓がドキドキする」という身体感覚表現を不安や緊張を伴う覚醒状態と結びつけやすいか、やる気や元気を伴う覚醒状態と結びつけやすいかという認知の個人差が、文章読解ペースに影響をおよぼすことが示された。文章読解課題では2種類の文章を使用した。一方は「心臓がドキドキした」という表現を不安や緊張を伴う状況記述に挿入した文章であり、他方は「心臓がドキドキした」という表現をやる気や元気を伴う状況記述に挿入した文章であった。

一文あたりの読解時間平均と変動係数を従属変数として、認知の個人差×文章種類の2要因分散分析を行った。その結果、変動係数において文章種類の主効果が有意であった($F_{1,34}=8.82, p<.01$)。また交互作用に有意傾向が認められた($F_{1,34}=2.85, p<.10$)。今回課題で用いた文章については、やる気や元気を伴う状況記述文のほうが不安や緊張を伴う状況記述文に比べ、読解時間がより変動しやすい傾向にあった。しかし、身体感覚表現をやる気や元気を伴う覚醒状態と結びつけやすい場合には、そのような文章種類による差が認められなかった(図3)。身体感覚表現をどのような刺激や反応と関係づけて認知しているかが、身体感覚表現を含む文章の読解ペースに影響を及ぼしており、個人の認知にマッチしない文脈で構成された文章に比喻表現が挿入された場合、読みのペースが乱れる傾向があることが示唆されたと言える。

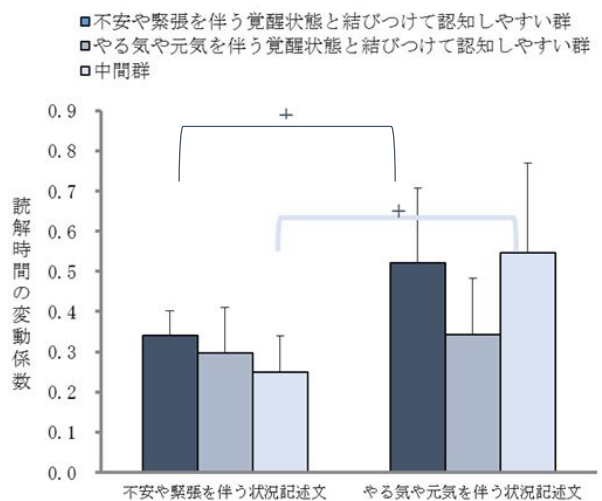


図3 認知の個人差×文章種類別の読解時間変動係数 (エラーバーは標準誤差、+ $p<.10$)

(5)以上の結果から、特性不安が比喩理解に影響を及ぼすこと、文章作成時の文脈構成に特性不安の影響が認められること、身体感覚をどのような状態と結びつけて認知しているかが文章読解のペースに影響を及ぼしていることが明らかになった。一連の結果から、不安という情動的現象について、比喩表現に対してどのような反応を示すかという言語行動的な観点からの検討が有効であることが示唆されたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

塚本真紀、作成時の文脈パターンの個人差に関する検討 - 身体感覚表現と言語的不安反応との関係に着目して -、尾道市立大学芸術文化学部紀要、査読無、12巻、2014、37-41

塚本真紀、不安状況下における言語行動に関する検討、尾道市立大学芸術文化学部紀要、査読無、11巻、2013、37-41

〔学会発表〕(計3件)

塚本真紀、身体感覚の関係性認知が身体感覚表現を含む文章の読解過程に及ぼす影響、中国四国心理学会第69回大会、2013年

塚本真紀、不安が身体感覚表現の文脈生成に及ぼす影響、日本心理学会第77回大会、2013年

塚本真紀、不安状況下における言語行動に関する検討、中国四国心理学会第68回大会、2012年

6. 研究組織

(1)研究代表者

塚本真紀 (TSUKAMOTO, Maki)

尾道市立大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：40310833